

小4以上

劇団風の子中部

白髪
の
一
ル

Rolling

原作 / 重松清
「白髪の一ル」(新潮文庫刊「せんせい」所収)
脚本 / いずみ凜
演出 / 中島研
制作 / 西川典之



音楽にはのう、歌にはのう
人を動かす力があるんじゃ

暴力に対して暴力は使わん。一緒に歌うことで戦ったんじゃ

3月28日(土)

枚方市総合文化芸術センター小ホール

17:00 開演 16:30 開場

◆お近くのおよこ劇場にお問い合わせください◆

◆鑑賞には親と子で3ヶ月の入会が必要です ◆会費：1人1200円/月 ◆入会費：1人100円

枚方中部およこ劇場



hcoyako@gmail.com

くずは・まきの
親と子の劇場



iso02101009@gmail.com

枚方南およこ劇場



minami_oyako@yahoo.co.jp

門真およこ劇場

☎ 06-7163-6460

uraurara@ah.wakwak.com

白髪のニール・ヤング

原作 / 重松清
『白髪のニール』(新編文庫刊「せんせい」所収)

脚本 / いずみ凛
演出 / 中島研
音楽 / 曲尾友克
ステージング / 桐山良子
照明 / 高本雄大
(総合演出はくま)

美術 / 中島研
田島千穂
演出助手・衣裳 / 河野真理子
舞台監督 / 大熊勝利
制作 / 西川典之

「えっ！富田先生がギター？」
ある日、物理の富田先生が突然声をかけてきた。
「一曲でええんよ。わしにギターを教えてくださいな。」
こうして、半ば強引に始まった高校2年の夏。
富田先生は俺たちに語りかける。

「ロックは始めることで、
ロールはつづけることよ。
ロックは文句をたれたことで、
ロールは自分のたれた文句に責任を取ることでよ。
ロックは目の前の壁を壊すことで、
ロールは向かい風に立ち向かうことなんよ。」



作品を創るにあたって

演出 **中島研**

今の時代、何事においても物事の素(もと)、原理が見えにくく、その見えない部分を素通りして生きているような気がしてならない。
今回の作品は、高校生から大人までの幅広い年齢層の、様々な生き方にスポットをあてている。
理解は誤解。人間は幸せそうに見えても、ぐっと涙をこらえていたり、悲しみの中に見えるように見えても、実は意外に明るかったり、表面だけで判断するのは、とても難しい。まして人の生き方は千差万別で一人ひとり、違う考え、価値観、感性をもって他人(ひと)にはわからない、いろいろなドラマを生きている。だから、誰かから自分の生き方を決められるのはまっぴらだし、自分で選択し続けながら、自分らしく個性的に生きたいと思っているのではないだろうか。
俳優たちは、役と自分を重ね合わせ、新しく、懐かしさもある音楽と共に確かに舞台上に存在する。時代と時の流れは、大きなまわる円盤型の装置で表現し小さな円盤は分解し、様々な個性の象徴として各場面の空間を表現した。稽古場では、スタッフも含め全員で作品の討議をくり返し共通認識を深めた。初期の段階から風の子中部の全員がプロジェクト(脚本・美術・音楽)に参加して皆で創り上げた。
今の時代、見えない部分を素通りして生きているような気がすると冒頭でふれた。この作品が観客と俳優が共に、その見えにくい何かを想像し、「生きる」ということについて考え、感じ合う契機になればと思う。それも演劇の大切な役割りなのだから。
そして、僕も公演本番の空間で、観客と俳優の感性に寄り添い、これからの自分の生き方を見つめ、深く呼吸していようと思う。

脚本 **いずみ凛**

高校時代、親から言われた言葉がいまだに忘れられない。それはわたしを心配して？よかれと思って出た言葉なのかもしれない。でも、その言葉は選択肢のひとつをつぶしたのだ。そしてわたしは親に言われたとおり、それをしなかった。そのおかげ？で別の世界に出会えたから、結果的には悪くなかったのかもしれない。でもあの時の悔しさは今も苦く残る。相手を思うからこそわかりあえない、近いからこそややこしい、長くつきあう家族ほど愛憎相半ばする存在は他にない。
人生、いつだって思い通りにならないことだらけだ。どんな世代であろうとも、生きている限り、調子よくすいすいと行かない。時代は変わり、「親の家業を継がなくていい」というプレッシャーは減ったかもしれない。多様性の時代だ、「こうあるべき」も少しずつ緩くなってきた気はする。誰でもネットで情報が集められるし、ずいぶん生きやすくなったのか？と言えば、そうとも限らない。情報は多すぎておぼれそうだし、世界はすごいスピードで置き去りにされそう。もはやこうしておけば大丈夫なんて生き方はないのだ。いや、昔からそんなものはなかった。
さあ、どう生きていこうか。
わからないからとりあえず、思い切り歌ってみる。
悩みながら笑いながら怒りながら。
身体が動けば心も動く。深呼吸してギターをかき鳴らし、バスターを踏み鳴らすんだ。



制作 **西川典之**

次の時代を作るのは今を生きる子どもたちだ。
その子ども達に現代(いま)は、尚早に「将来何になるのか」を具体的に考えさせる。これは無理があるように思えてならない。本来、自分の生き方を模索していく思春期には、本物の学びとたくさんの実験を積み重ね、多様な人と出会い、自分の世界を広げていくことが大事なのではないだろうか。早期に選択肢を狭くしてしまうことは、大人たちの都合で子どもたちの未来を奪ってしまっていないか。人生なんて「いろいろやってみなければわからない」のだ。生きている実感も積み重ね、自分の生き方もがきながら掴んでいくのだと思う。今を生きる中高生たちもそうあって欲しいと願うばかりだ。
1960年代、アメリカから始まったベトナム戦争反対の運動は世界各地に拡がり、ワシントン大行進でジョン・バズが歌った「We Shall Overcome」の歌声は日本の若者も奮い立たせた。歌には人を動かす力が、世界を変える力がある。そんな時代に、ニール・ヤングを聴き青春時代を駆け抜けた「白髪のニール」富田先生は高校教師になり、自身が親になることをきっかけに教え子の長谷川に「ニール・ヤング」をギターの弾き語りで歌えるようにしてくれと頼み込む。ここから物語は始まる。そして、この一つの出会いが二十数年後の若者たちを突き動かしていくのだ。富田先生は自分の生き方を模索し続ける。長谷川もフクちゃんも自分と向き合い、前に進もうとあがく。そして現代(いま)の高校生たちも悩み、苦しみながら「自分を生きたい」という気持ちを持っていく。
富田先生と教え子たち、そして世代を超えた教え子同士が出会い、富田先生に刺激され、自分の道をロックしながら、ロールしながら…物語が、未来が、転がり続ける。

